

戦中戦後のくらし

浅野 日出男

東京から鵜沼へ

盧溝橋事件（昭和 12 年）のころ、浅野物産に勤めていたが、この年は、色々と生活の変化があった。長男が生まれ、名古屋の家を畳んで弟と母が上京、一度に 5 人家族となった。

昭和 13 年、徐州占領、翌年にはノモンハンが揉め、ヒットラーがポーランドへ侵入し、欧州も火薬臭くなると妻の兄、伊藤は鵜沼の別荘へ移った。

パリが陥ち、北仏印進駐*1、三国同盟締結と軍事色が濃くなった昭和 15 年、東京も家屋の間引きや防火壁の話題が出始め、私達も鵜沼の別棟に移った。小田急と藤沢から国鉄で約 1 時間の通勤となる。

私は、会社でアスファルトの係をしていた。舗装材は、軍用道路や滑走路への出荷が増えた。東北の山間にも小さな滑走路を造っていた。迷彩用にも使われた。米なしで泊める温泉宿を利用した。夜行では、女子挺身隊*2 や援農隊と乗り合わせた。

戦況が進展すると社員にも赤紙*3 が来て、主を失った机が増えた。部課の統合が行われ商談も減った。落下傘部隊など南方の戦果が謳われたころ、商社の進出が目論まれ、駐在員の話が打診された。当時の家の状況では承諾しかね、遠回しに断った。私に代わって行った社員は魚雷の犠牲になった。

暫くして丸の内の各社で自警団を組織することになり、私にその役が当てられ、夕食後地下道の筵の上でゴロ寝をする破目になった。点呼するだけで何事もなく一週間で交代したが、これが体調を崩すもとになった。

二男俊紀が生まれた昭和 16 年、真珠湾攻撃、マニラ、シンガポール陥落と翌年にかけて、戦果高揚の時期を迎えたが、ミッドウェイ海戦、ガダルカナル上陸と陰りが見えてきた。

11 月末っ子の陽子が誕生。年末に大阪の理化学工業にいる弟に赤紙が来た。短い別れのひとときだった。昭和 17 年 1 月 2 日、名古屋に入隊、2 日後北支へ出発した。婚約は解消と書き残して。

通勤列車からは出征見送りの光景が毎朝のようにみられ、工場地帯では空のドラム缶から残油を手ポンプで吸い上げたり、荷運びをする全裸の白人俘虜*4 が見えた。これが戦争の一面か。段々と列車の運行が不規則になり延着証明*5 を貰っては出勤した。

昭和 18 年、弟の出征の後、母は食糧事情や弟への気掛かりで氣力を失って寝込んだ。好物の甘い物も口にできずに弱っていった。長男正毅が入学したが、罹病し母と床を並べた。医者 of 誤診で危篤になった。母のために藤沢から呼んだ老医に救われたが、母は臨終を迎えた。葬儀には会社の代表も参列してくれた。戦地の弟に報せるのを控えたが、叔父が悔み状を出したために知られてしまい、弟の心情を思った。

伊藤は、小倉石油にいたが、独立のため、鵜沼の家を処分し新築移転。私達も「離れ」を解体し農村との境に移転して引越した。さつま芋や南瓜が作れる土地だ。身体がだるいのを抑えて勤めていたが、東京時代の医者に見て貰ったら肺門周囲炎といわれ、休みことになった。

その 9 月、赤紙が来て名古屋に行った。友人宅に泊まり、2 人で検査に行き、私は丙種合格で帰された。暫くして徴用があり小田原まで行ったが、免除になった。

昭和 19 年の 1 月、久しぶりの軍事郵便には白衣姿の弟の写真があり、「チフスで天津病院に入院したが回復したので原隊に戻る」とあり、太ったようでホッとした。

去年の病気で 1 年入学を遅らせていた長男も進学し出し、私もボツボツ出社した。

5 月の初旬、弟戦死の報せがあった。一度に血の気が引いた。部厚い軍事郵便が届いたが、読むうちに疑問が湧いた。「弟は斥候隊の護衛として部下と出動し、北支河南省王各庄付近で敵に遭い、戦闘となり包囲され、最期に先頭切って抜刀突撃し全員戦死。略奪のため遺留品なし。丁重に火葬に付した。同封の包は戦友の持ち合わせの金を集めたもの」といった悔み状である。私は読み返しても味方の苦戦を手取るように見ていただけて助勢の手段も取らず、見殺しにした軍隊を理解しかね、こんな講談めいた報告で肉親が感激するとでも思っているのか。皆に読ませてから腹が立つので焼き捨てた。5 月中旬慰霊祭と遺骨引渡しの通知があり、宇都宮へ 2 人で行った。写真から、顔だけ 8 つ切りの画紙に 4B でデッサンしたものを持って行った。モーニングに下駄履で参列し、遺骨を貰って来た。東京、名古屋の叔父叔母、会社の代表も参列の上葬儀をした。後日、勲章と御下賜金の証書を届けてきたが、その後音沙汰もなく空文となった。勲章も空しいもので仏壇の抽出に入れたままだ。6 月には、マリアナで海軍が叩かれ、北九州はじめ全土の都市空爆が始まり、サイパンの悲劇、レイテの全滅と敗色が歴然と見えてきた。

明けて昭和 20 年の 1 月、ルソン島へ上陸した米軍はマニラを奪還、2 月硫黄島の攻防に決着が着くと、3 月の大規模な東京空襲、沖縄の攻撃が開始され、もうこのころには朝に乗った列車は、止まり止まりして昼近く到着。会社へ行っても人数が少なく電話連絡も相手が出ず、やむなく 2 時発の列車に乗り込んでも夕刻に動く。藤沢に夜中に着き、車の相乗りや徒歩で帰ったものの、休む間もなく警報で京浜方向の空が赤くなった。

閑院宮が江の島洞窟に避難されたと言われたころ、急に昼間の小型機来襲が甚だしくなった。2、3 軒先の家に機関砲の弾が刺さったという。新聞に藤沢の耳鼻科の中村院長がスパイで挙げられたと出ていて驚いた。二男の耳下腺炎の手術で通院し、先週江の島栈橋で看護婦数名を連れた院長に会ったばかりなのに、地下室に無線基地を作り敵機を誘導していたとのことだ。

配給の米も少なく学童疎開、妊産婦も疎開し、男は本土決戦に備え塹壕掘りに出され、一家はバラバラの運命か？

美唄へ

(あさの ひでお 明治 43 年生まれ)

***1 北支** 中国北部

***2 警戒警報** 敵機来襲の目的地がつかめないとき、その進行方向でサイレンを鳴らし警戒を呼びかけた。

***3 高粱** 中国産のもろこしの一種。高さ 4 メートルに達する。食料、飼料、またコーリャン酒の原料にする。

***4 集団帰農** 昭和 20 年 5 月、政府は空襲などで戦災にあった都市の罹災者救援のため、「北海道疎開者戦力強化実施要綱」を策定し、5 万戸、20 万人の集団移住計画を決定し、新聞などを通じて移住者を募集した。道庁内には「北海道集団帰農者受入本部」が設けられた。この移住は、前後 25 回行われ、約 3400 戸、1 万 7 千人が東京、神奈川、愛知、大阪などから道内各地に入植したが、一部を除きほとんどの入植者は厳しい自然環境に打ち勝てず、入植地を離れていった。

昭和 20 年 8 月 3 日に美唄に到着した神奈川県集団帰農者は、42 戸、182 人だった。

***5 棧俵** 米俵の両端につけるわら製の丸いふた。「さんだらぼうし（棧俵法師）」、「さんだらぼっち」ともいう。

***6 プラオ・ハロー** どちらも農耕の道具。

プラオ（プラウ）は、家畜の力またはトラクターの牽引により耕地を切り進み、土塊を反転する農具。唐鋤。

ハローは、プラウで耕した表面の土塊を粉碎し、耕地をならすもの。碎土機。